

## 【メラニー・クラインの衣鉢を継ぐ者たち】

— クライン派精神分析の歴史的概要 — (1982)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

[※原題; Growing points in psychoanalysis inspired by the work of Melanie Klein]

ミセス・クライン(Melanie Klein)の偉大な発見は、幼き子どもたちが遊びやら語らいのなかで自由に示すものをじっくりと観察し興味を持ち続けた、そうした彼女の能力によって可能であったといえましょう。彼女は、子どもたちの遊びには常に何らかの意味が溢れていると断言しております。そして彼女はそうした仮定でもってそれらに接近したのであります。彼女の洞察および‘理論的な公式 theoretical formulations’は最初の頃は大いに鼓舞され、それから多分彼女のフロイトの理論への献身によって幾らか抑制されていったように思われます。フロイトに彼女は甚大な敬意を払い、そして自分としては彼の業績を継ぎ、児童分析の領域においてそれを応用し、拡大させてきたといったふうに見ていたからであります。彼女の仕事をフロイトがさほど評価しなかったということが実に彼女にとって大なる悲嘆の源でありました。しかしながら彼女の観察および理論を振り返りますと、それらがどれほど画期的なものであったかということがご覧いただけるはずで、そして今尚もそうなのです。歴史に教えられますことは、一つの変革にとってもう一つ別の変革は、それが‘群’全体の主義主張に忠実でない以上、評価されることはおよそあり得ないということでありましょう。ここに、ビオンの著書【Learning from Experience】の「序」に掲げられたトマス・ブラウン Thomas Brown の引用句を拝借することにいたします。

しかしながら、〈知〉の不倶戴天の敵であり、かつ〈真実〉を処刑執行するうえで最大の威力を発揮するものとは、〈権威〉への絶対的な固執であり、なかでも特に〈過去の遺物〉の指図するものにわれわれの信用を置くことである。— トマス・ブラウン 『卑俗なありふれた誤謬への審問:〈遺物〉への遵守について』 (Bion.1977)

ミセス・クラインの著作は、フロイトのそれにも似て、‘遺物’として記憶に留められるといった、そうした危険性を自ら招くものともいえましょう。もしも人間のパーソナリティーといった研究分野において、さらなる問いかけを鼓舞するよりも、むしろ権威ある「タルムード」、もしくは「コーラン」といったように、それらが予め出来合いの答えを提供するものとして活用されるとしたら・・・彼女はそうした人間のパーソナリティーというものの深遠さおよび複雑さを解き明かすうえで甚大な貢献をされたわけであり、児童分析というフィールドの延長上に、さらには「母子観察」への興味を彼女は募らせてゆき、そうした方向づけで弟子のエスタ・ビックを鼓舞していったわけですが、やがてそこからさらにはチャイルド・サイコセラピスト及び分析家の養成にそれが導入される運びとなっていったわけであり、それら「母子観察」からあまりにも多くの驚きやら疑問などが頻出し、それ故に発達理論の最良なるものを所有しているといった自己満足に留まる傾向は絶えず揺さぶられるといったことが実際起こってまいりました。

ミセス・クラインの業績についての評論は、これ迄も多くなされており、それも違った見解から広範囲に亘っております。もっとも著名といえるのは、おそらくハンナ・シーガル Hanna Segal の【Introduction to the Work of Melanie Klein (1964)】、そしてドナルド・メルツァー Donald Meltzer の【The Kleinian Development】(1978)でしょう。これらの著作は、メラニー・クラインの業績が精神分析にもたらしたものと、精神病理及び病理的な臨床実態への囚われから、新しいそしてより発達心理学並びに人間関係の研究に深く基礎付けられるものへと眼が転じられたということを示唆しております。幼い子どもとの分析治療及び観察から、「対象関係」とは誕生以降の赤ちゃんの母親のオッパイとの関係性からスタートするということに彼女は気づかされたであります。彼女は徐々に対象関係性に基づくところのパーソナリティーの発達理論を構築してまいりました。それは根本的に情緒的成長を妨げるところの‘自己愛的な関係性’によって常に脅かされておりますから、画然とした区別がなされるべきものなのであります。この理論は、人間のパーソナリティーの無限なる複雑さおよびアイデンティティーの概念についての見解をさらに切り拓くものであります。つまり、われわれは外界 outside world に生きているだけでなく、「内界 internal world」に於いてもまた生きているということなのであります。それは実にリアルであって、それ自身の関係性並びに交流 transactions があり、またそれ次第でわれわれにとって外界がどう見えるのか、そしてそれがわれわれにどのような意味をもたらすかを彩るといった認識に至ったのであります。彼女の業績は、子どもたちは親密な関係性における気配りの行き届いたケアしてくれる人々を摂り込み、同一化することをとおして個人 individuals として発達してゆくこと、さらには「無意識的な空想 unconscious phantasies」は「内界」に於いて生じた交流 transactions の軌跡を物語っており、それらは子どもたちの「遊び」並びに大人の見「夢」に於いても表現されるといったことを示しております。「遊び」は、子どもがこの世界をどうにか意味あるものとしようとする彼らなりの企てであります。そしてそれは、深く注意を傾けてくれる分析家もしくはセラピストを相手にしておりますと、その意欲が俄然呼び起こされ、そしてそのような彼らによって何らかの意味とされたものが転移されることになるわけであります。

ミセス・クラインは子どもの分析において、その早期には、子どもたちの教育における予防的方策としての「早期分析 early analysis」の役割について楽観的でありました。疑いもなく、彼女はその分析がもたらすところの結果に大いに励まされたといえましょう。とりわけ多分、彼女が幼い子どもたちにおいて最初のうち発見したところの投影的なメカニズムが壊滅的な打撃を与える過酷な‘超自我的人物’の創造において果たす意味合いを理解し、そして解釈された結果として、心が解放され楽にしてあげられたことであります。そして時を経るにつれ、おそらく殊にコンティンされていない、そして検知不能でもある「羨望」が良き関係性の発達およびその維持にもたらす陰険で有毒的な効果を発見するに至ったとき、彼女は以前ほどには楽観的とはもはや言えなくなったのであります。妥協を許さない忠実な分析的アプローチというものが人間の状態 condition を唯一‘治癒’し得るものとして彼女の信念は揺るぎないものがあつたわけですが・・・そのゴールは、究極的に到達し得ないものであるかもしれない

にしても、その方向性は明瞭であります。無論のこと、それを探すために絶えず苦闘と警戒心が要求されましようけれども・・・。

1940年代当時、英国の精神分析学会 the British Society での論争に於いて、幾人かの分析家たち(特に30年代後半にウィーンからフロイトおよびアンナ・フロイトに連れ立って訪れた、どちらかというとフロイトの伝統的信奉者と呼んでいい人達)は、ミセス・クラインが幼い子どもたちの特性とした「空想 phantasies」という概念によって心乱され、かなり不穏な空気が漂っていたわけでありませう。が、それ以降ミセス・クラインの弟子並びに同僚たちによって極めて実りの多い業績が残されました。殊に成人の精神病患者の治療であります。これは殊に彼女の論文《Notes on some schizoid mechanisms》(1964)によって刺激されたものといえませう。この論文で彼女は初めて「投影同一化 projective identification」ということばを使用しております。そこでは、さらに‘自己愛的な関係性’における投影 projection の役割というものにさらなる解明が試みられております。現在ではおそらく、殊にシーガルSegal、ローゼンフェルドRosenfeld、そしてビオンBionといった顔ぶれによって手掛けられた精神病患者との分析的治療において発展した洞察の幾らかが成人の境界例の患者たちとの分析治療においてより一般的に応用されているといえるか思われます。メルツァーの「Sexual States of Mind」(1973)、それは成人および児童といった多様な患者たちとの臨床に基礎づけられたものでありますが、パーソナリティーの自己愛的ならびに対象関係づけられた構造を吟味するところの包括的な企てとっていいでしょう。それは、メラニー・クラインの「パラノイド・シゾイド態勢」および「抑うつ態勢」に関連づけられておりますわけですが・・・。そこでは、具体的な症例をとおして、「性的(発達の)な心の状態」とは、愛情によって摂り込まれたところの両親、そして愛情ある生殖において結ばれかつ相互的に交流し合う自由を互いに許しあうところの両親との同一化に基礎づけられているということが例証されております。クライン夫人は、その著作【Narrative of a Child Analysis】(1961)の中で「投影同一化」の註釈をこんなふうに語っております。

私の見解では、内在化および投影同一化のプロセスは相補的なものであり、新生児の当初から機能しているものと思われます。それらは致命的に「対象関係」を決定付けるのであります。母親は、その内側のあらゆる対象とともに取り込まれると感ぜられるといえませう。すなわち他の人に入り込んだ主体 subject は、その対象(及びそれらとの彼の関係性)をも取り込むといったふうにも感ぜられるのです。内在化された対象関係性の変遷をさらに探索してまいりますと、それらどの段階に於いても、投影プロセスに深く関わり合っているのでありまして、私の見解としてはそこからパーソナリティー並びに対象関係の発達について解明するヒントが多々もたらされるものと考えられます。(p.114)

1960年代のビオンの業績において、特に【Learning from Experience】(1962), 【Elements of Psychoanalysis】(1964), 【Transformations】(1965)、そして【Attention and Interpretation】(1970)であります。それらは「思考の起源および発展」について探索が試みられて

おります。それらは、成人を対象とし、そこで生じる「幼児性転移」の研究、並びに分析家の「転移」を受容しかつ思考するといった、その役割についての探究から派生してまいったものであります。彼の仮説は、幼子とその早期の「思考するところの母親 a thinking mother」との密接な接触をとおして思考することを学んでゆくというものでして、それはまず初めには部分対象、すなわち‘オッパイ’として把握されるものなのであります。彼は、メラニー・クラインの「投影同一化」の概念を拡大解釈し(彼女がフロイトの「投影」という概念を拡大解釈したように…)、そして子どもの投影を受容しかつ対処するうえで母親がどれほど重要極まりない役割を担っているかといったことを縷々述べていったこととなります。彼は幼子が、プライマリーな不安感—すなわち死ぬことの恐怖—に駆り立てられ、そうした恐怖を、それを経験するところのパーソナリティーの部分と一緒に、投影するよう駆り立てられるとも語っております。もし母親が、その腕と同様に、恐がっている幼子を受容するべく‘心のスペース’があれば、彼女はそれについて考えるでしょうし、その苦痛がいかなるものか、その性質を直感し、そしてそれに応じて行動に出るといったことをするでしょう。それから‘思考する母親’によってどうにか了解されかつ解毒された、それら赤子のパーソナリティーの恐がっている部分を、慰めを与えるといったことだけではなく、より改善された体裁でもって戻してあげられることでしょう。でありますと、そうした具体的かつ適切に反応させるところの「母親の思考し、かつ活動する心」とは、‘慈愛ある結ばれた対象 a benign combined object’を摂り入れる基盤になるものと言えましょう。それはすなわち、絶えず発達的であって、決して静的な(動きのない)ものではないということでもあります。ピオンは、投影を受容することのできない母親について語っております。それは幼子の苦痛・困窮に対して無感覚のまま、それによりいっそう苛烈さの増した投影を呼び起こすといった傾向にあるということになりましょう。言うなれば、閉められた扉に叩きつけられるかのように、パーソナリティーの断片化(破碎)fragmentationへと導かれてゆくわけでありませぬ。これはまた、‘全知なところの虚ろな道徳的な超自我’の源の一つと言えるかもしれません。それは「経験」すること・「発達」してゆくことを敵視するものであります。そして知ったかぶりの、つまり独創的ではない答えは得意とするでしょうが、決して疑問を挟まれることなぞ我慢できないといったふうであるに相違ないでしょう。

ミセス・クラインは、「認識愛的衝動 epistemophilic instinct」について言及するとき、子どもに生来備わっている‘世界について学ぼうと駆り立てられる衝動’にその強調点を置いております。ピオンは、これについてはもう一つ別の彼なりの観点を示しました。すなわち、それを己自身について‘真実を知ること’の基本的ニーズとして見做したのであります。しかもそれは、子どもについての既成概念を放棄し、かつ自制心があり、そして自らの幼児的な感情というものをよく認識でき、そして折々の状況に応じてわが子から折々に届けられる投影およびコミュニケーションによく反応し得る母親によって育まれるといったふう語っております。

ピオンはその業績のなかで、ミセス・クラインが暗に示した事柄を明示的にしたのであります。と言いますのは、彼女のすべての児童分析の理論と実践は、理解される限りにおいてであったとしても、真実が語られることは子どもたちにとって有益であるということ、たとえそれを耳にするのは不快だとしても、

時としてはそうでしょうが、でも不快な経験だとしても、事実もしそれが分かち合われるならば、心慰められることにもなり、また育ちをはくむとも言えるのでありますし、さらには苦痛を直視し、耐えることなしには成長は<sup>おぼつか</sup>覚束ないといった仮説から派生しているのです。ビオンの論点・主張は、心的苦痛 pain というのはそれを考え抜くことができればよりいっそう耐えられるというものであります。

母親は、まず初めに子どもにとっては「考える the thinking」という<sup>はたらき</sup>機能をするわけであります。子どもはその機能を摂り込み、そしてまずは彼女の‘不在’においてそれを活用することへと駆り立てられるのです。すなわち、その最初の考えとは「不在のオツパイ」ということになりましょう。

ビオンは、思考の源泉について、パーソナリティーは経験から学ぶことを通して進化することについて、そして‘虚偽’もしくは経験の破壊をとおしてのパーソナリティーの病理的な歪みについて、極めて深遠で斬新な考察を発展させていったわけですが、それらは、投影同一化、分裂そして投影といった現象、さらには価値のシフトがパーソナリティーの「妄想・分裂的態勢」から「抑うつ態勢」への移行に於いて起こるといったミス・クラインの発見に由来しております。この他にも2つ、初期の発達へ向けられた探究が進められておりました。「乳幼児観察」そして「精神病的児童の分析治療」といったフィールドであります。これらは或る心の状態を描写しております—いっそう正確には‘心の無い状態’といえましょう—投影と摂り入れのメカニズムを援用したところの対象に関係付ける状態よりもずっと以前の、より原始的といっていわけですが、すなわち‘二次元的な’状態でありまして、そこでは幼子のパーソナリティーは抱えられず、そしてアイデンティティーは喪失されているわけであります。

フランス・タスティン Frances Tustin は、論文および著作などで実に鮮やかに自閉症の子どもたちとの治療を描写しております(1966;1969;1972;1980;1981)。アン・アルバレス Anne Alvarez(1977)はこのジャーナル[※訳註; Journal of Child Psychotherapy]で或る自閉症の男の子の分析治療についての詳細を発表しております。ドナルド・メルツァー Donald Meltzer は、ジョン・ブレナー John Bre mner、シャーリー・ホクスター Shirley Hoxter、イスカ・ウィッテンバーグ Isca Wittenberg、そしてドリーン・ウェッデル Doreen Weddell と一緒に著書「Exploration in Autism」(1975)を出版いたしました。そこでは幾人かの子どもたちの長期に亘る治療から、彼らの疾病および発達の挫折は投影および摂り入れのメカニズムを援用するうえでの能力の欠如もしくは瓦解 breakdown を招いているといったことなどが詳細に解説されております。こうした自閉的な状態は、他の患者たちに見られる‘浅薄さ’の領域、そして情緒的な経験をしてゆく代わりにただ情報を集めるだけの強迫的な学習といった領域とも比較されるわけであります。

上記したところの人々すべて誰もが、ミス・ビック Esther Bick とそれぞれ或る時期と一緒に仕事をなさっておいでであります。彼女の探究結果は、極端に簡素ながら含蓄のあります論文「The Eexperience of the skin in early object relations」(1968)に叙述されております。何年にも亘る母子観察、そして精神病の子どもとの治療に携わり、じっくりと耳を傾けてきた経験のエッセンスがそこ

にうかがわれます。彼女は、‘内なるスペース’といった感覚を持たない‘心の原始的な状態’について描写しております。そこでは、パーソナリティーの各部分は何らかの外界の刺激、すなわち光、音、パターンなどに、貝が岩場にピタッとくっついて離れないといった恰好で、つまり相互的な関わりがあるのではなく、むしろしがみつき付着しているわけであります。このような赤ちゃんは、その彼が付着するところの表面から引き離されますと、バラバラになったり、その中身が漏れ出すといった危険に晒されることになるのです。このような「二次元的な状態」は、普通誕生後の最初の数日間には広く一般的といえるのであります。赤ちゃんがその‘無定形なる苦痛’を母親によって一つにしっかりと抱えられ、慰めを得て、何らかの焦点が与えられ、最適なところでは、彼女の腕の中で口に乳首を咥えてといった感じで落ち着くといった経験が繰り返されるのを待つまでは・・。すなわち、それが彼という‘パーソン(一人のひと)’のためのコンテインメント(包容)containment 並びに焦点 focus ということになるわけであります。順調にゆけば、これは赤ちゃんに、自分の痛苦を排出することのできる、コンテイン(包容)してくれる対象といった感覚を与えるでしょうし、それを彼自らのなかへとやがて取り込んでゆきますと、‘慰めを与えてくれて痛苦を癒してくれる対象’といった感覚を与えてもくれるでしょう。ミセス・クラインの言葉では、それは彼をして対象を‘良いオツパイ・悪いオツパイ’といったふうに分裂させてゆくことができるということになりましょう。悪いオツパイを投影し、それから繰り返し良いオツパイを取り込み、それを自分のパーソナリティーの中核として内在化するのであります。そうすることで、良き対象からの「分離 separateness」にも直面でき、そして投影を改めて取り戻すだけの‘力強さ’をも獲得し得るわけであります。

ミセス・ビックは、この心の原始的状態について(良き内的対象との同一化に基礎づけられたアイデンティティーの喪失、詰まりはパーソナリティーがバラバラになりかねないといった状態)、それはショックやらストレスを受けたときに再発すると語っております。例えば出産後といった事態に於いてであります。彼女は「二次的皮膚」というものを語っております。それは、バラバラに崩壊するといったことや、パーソナリティーに‘焦点’を与えてくれる対象との‘付着 adhesion’から引き剥がされるといった経験に備えての防衛機制であります。これは、パーソナリティーの‘筋肉の強健さ muscularity’が総動員されて可能となるものであります。大概のところ認められるのは身体的な動き(運動性)においてでありますけれども、でも微かにメンタルな機敏性 agility においてもそうであります。つまり或る種のおしゃべりにおいて、その目的が意味を伝えんとするのではなく、ただメンタルな運動性の発散でしかなさそうに見える場合であります。多分「二次的皮膚防衛」には多様性があるといえましょう。例えば不安感に対する組織的かつ一群の防衛がそうでありますように・・。

さてここで、乳幼児観察および臨床例の記録の抜粋をご覧くださいませ。それらは「二次元的心の状態」及び「三次元的な心の状態」がどのように相違するのかを例証し、もしくはそうした質疑をもちかけるものと思われませ。詰まりのところ、発達が「投影」と「摂り入れ」とおして遂げられてゆく心の状態であるのか、或いはむしろ‘意味’の内なる世界が何ら機能していない、もしくは停止されている心的状態であるのか、そうした相違がうかがわれるかと思われませ。(※)

## 《観察例；赤ちゃん T》

観察者からご紹介いただいた T 夫人は、最初の子どもの出産を間近にしておりました。彼女は、知性的ともいえるお若い女性で、外見もモダンで、多趣味で目一杯日々を謳歌していたともいえますが、それはまた些か混乱した人生のようにもうかがわれました。

彼女らが最初に会った折、観察者はその母親の装いのなんともけばけばしい外見に圧倒されたのであります。ファッション雑誌からあれこれピックアップしたようなものの珍妙な並列というか、実にごちゃ混ぜであったわけです。彼女が動き回ると、恰も広い劇場の舞台の上でこれみよがしに演戯するふうで、実に芝居がかった趣きなものでした。彼女は観察者にたくさんの質問を矢継ぎ早に浴びせかけるのですが、それへの返答にはまったく耳を傾けているふうではなかったのです。

それから、会話の焦点は彼女自身へと移りました。そして彼女は観察者に、彼女自身のことそしてその二度目の結婚について詳細を面々と語ったのであります。それに分娩の恐怖、その耐えられない激痛やら危険性、それで<全然何も感じないはずの>帝王切開に断然すると決心しているとのことでした。

この最初の出会いは、赤ちゃんが誕生した後に起きた多くのことがらを予感させる‘青写真’ともいえるものでした。母親は観察者に、取るに足らない瑣末な情報やら、答えを全然求めてもない質問やらを浴びせかけるばかりなのでした。最初の3ヶ月ほど母乳が赤ちゃんに与えられました。しかし彼女の注意は滅多に子どもに向かうことはありません。観察者に対して束の間注意を向けることはあっても、子どもに対してそれ以上ではなかったわけです。授乳している間、彼女は電話機を取り上げ、そして全然理由なしに人に電話をするということがありました。彼女は授乳中、突然立って隣の部屋に行くことがありました。戻ってきて赤ちゃんを抱っこして、キスをしたり、数秒ほど彼をくすぐったりしますが、すぐさま又別の何かに気が移るのでした。もしくは、突如まったくのところ静止して動かなくなります。両手にじっと眼を凝らしたり、もしくは遠くをぼんやりと眺めていたり・・・。

観察者が最初に赤ちゃんを見る機会を得たのは彼が誕生後15日目でありました。そこで、赤ちゃんがどうやらしっかり目覚めていないようで、乳首を口で啜えることも困難であるようすが認められました。もしくは母親が情緒的にそこに居ないということ、彼をしっかりと抱えたり、またしっかりと抱えられるように赤ちゃんに手を添えてやるといったことも全然していないと観察者には感じられたのであります。

最初の授乳時から、赤ちゃんは口の中で巻きあげた舌を乳首に押し付けるような仕草をすることがあり、つまりそれで部分的には乳首を掴んでいたとしても部分的にまたそれから距離を取っていたとも言えるでしょう。授乳の終わり頃になりますと、彼は静止状態に陥り、そして眠るわけでしたが、どうも

緊張が抜けきれず、ひどく疲れているふうに見えたのです。‘良き経験’を自分のうちに取り込んだといった至福やら充たされたといった感じも全然うかがわれなかったわけです。何やら怯<sup>おび</sup>えたとき—事実彼はしばしば怯<sup>おび</sup>えたふうに見えたわけですが—彼は眠りへと戻り、かなり持続的に舌を吸っておりました。母親は彼が汗かきだということを愚痴<sup>くち</sup>ります。それについては観察者自身も目にして気づいたことでもありました。それからもう一つ、赤ちゃんは几帳<sup>きちょうめん</sup>面に清潔にされ、そしてパウダーも体に塗られていたにも拘わらず、どうもしばしばその体臭が気になったのです。

T夫人の赤ちゃんの扱いはきまぐれで、場当たりのあり、彼のニーズにはまるで頓着していないふうでしたけれども、愛情は充分あったといえます。しかしながら、彼の生活面で2つ有害な影響がありました。まずその一つは、父親違いの姉である3歳児のグロリアです。その美しい小さな星にあやかるようにと名付けられたとおりに非常に知性豊かな子どもでしたが、赤ちゃんに対して陰険で意地悪をすることがよくあったのです。そして母親がそれに全然気づいていないのをいいことに、それで密かに母親を軽蔑してもいたわけでありました。その二つ目は、T夫人の雇っていたメイドさんです。赤ちゃんが3ヶ月目になった折に広い家に移り住み、その折に彼女は雇われたわけなのですが、この時期、T夫人に健康の衰えの兆しがありました。＜意識が薄れてしまう・・・＞やらくまるで中身がすっかり流れて空っぽになってしまうみたい・・・＞などと訴えております。それで彼女はそのメイドさんにますます依存するようになってゆきました。メイドさんは魅力的な容貌をしており、自信ありげで、でも裏表のある性格で、赤ちゃんを真っ当に扱えない女主人をひそかに侮蔑していたわけでありました。そして赤ちゃんに対してほんのわずかに覆われたサディステックな態度を取り、彼を焦らして、その無力であることを見ては愉しんでいたということになります。哺乳瓶、そして食べるものは赤ちゃんの彼にとって格別に重要であるすべてとなりました。そのメイドはその彼の期待感を掻きたて、そしてそれをお預けにして、彼が狼狽し、失望する顔つきを見ては笑うのでした。赤ちゃんTは決して要求を声高に求めることはいたしません。もし要求が満たされない場合にしても、カンシャクを起こすといったこともありません。彼が顔に浮かべる表情は、困惑そして狼狽といった印象であります。後にはメカニカルで、まるで芸を仕込まれたふうな微笑を浮かべることがありました。

彼は、母親が脈絡もなしにあっちこちと部屋中をうろついている間にも、メイドのいかにも優しげな焦らしにもあそばされるがままに放置されておりました。彼女はわずかにメイドに気後れを感じていたようであります。そうだからなのか、赤ちゃんがまごつき当惑しているとき顔に浮かべるおかしな表情をメイドと一緒に笑うことがありました。彼女は赤ちゃんが苦しんでいる一人の人間であることをまったくのところ理解していないかのようなのです。メイドは彼が苦しんでいることは充分承知していたわけでありました。それは赤ちゃんの弱点に付け入ることでサディステックな快感を味わっていたグロリアもまたそうでありました。観察者の他にもう一人、赤ちゃんが今や習慣となった動揺やら引きこもりの表情を見てとって哀れと感じたのは父親でした。彼は時折その顔付きに哀れの情を浮かべて、＜なんとまあ、可哀想な子だこと・・・＞と不憫<sup>ふびん</sup>がるのでした。観察者にしても父親にしても、彼が時として動揺を来たしているときに恰も助けを求めているかのように見えたのです。赤ちゃんの発した最初にことばは＜ダディ(お父ちゃん



ん) > でした。そして父親が彼の元を去り、別の誰かと一緒に置き去りにされたとき、彼はいかにも惨めそうに顔をしかめるのであります。そうしたことは初めてのことでした。

赤ちゃんが5ヶ月目になった頃、観察者は彼が身体的な苦痛に対して殆ど無頓着であるように見えることを気づきます。この時期二度ほど、グロリアが、誰も見ていないと思い、彼を引っ掻き、それから彼の腕を捻っているのを目撃したわけでありました。赤ちゃんは何の反応も示しませんでした。しかし彼の苦痛に対する無感覚以上に気づかされたことは、彼にはまったくのところで喜びも自発性も見当たらないことでした。その最も明らかなのは微笑がまるでないということです。

こうした情緒的な平坦さを埋め合わせするかのように、彼は6ヶ月ごろから早熟ともいえる筋肉質の発達を示し始めました。それから立ちできるよう学びます。そのすぐ後、立ち上がれるようになり、それから横になることは滅多にありません。もし彼がお座りをさせられると、例えば食事のためだったりですが、彼は足をグイと踏ん張り抵抗し、かなきり声をあげます。8ヶ月目の頃、彼は最初の歩行を始めました。そして9ヶ月目には容易に怖じけることなく一人で歩き始めたのです。しかしながら自傷の傾向があらわれてまいります。それはスキル不足というよりも、どうやら故意にといった印象でした。なぜならそこにあるモノにぶつかってゆきだけではなく、自分のからだを引っ掻くこともよくしていたからです。

ここに11ヶ月目の赤ちゃんTについての描写があります。

夏が過ぎて、彼のしょっちゅう絶え間なく歩き廻ることを除けば、彼の様子はいつそうぼんやりと虚ろでひどく感情が平坦な印象でした。彼のからだからはひどく悪臭が放っており、引っ掻き傷が体中あちこちにあり、絶えずうるさく舌を吸っておりました。彼は母親に躡けられたとおりのパフォーマンスのレパトリーが幾つかあり、それは母親をひどく安心させるようでありました。彼は両手を叩くことができ、くるくる廻ることも出来ました。そして「Ring-a-Ring-o' Roses」の歌〔※訳注；マザーグースに分類される、子供たちが手をつなぎ、輪になって歌う唄〕を彼女が歌うと、彼はそれに合わせて円く輪になって踊ることも出来たわけです。時々彼は失敗を犯し、つまりそのパフォーマンスは間違いであり、お願いされたものではないということがありますが、誰もが大笑いします。しかしTはこうした状況でもただ混乱したふうな戸惑いを隠しません。突如恐怖でからだが麻痺したみたいに、その憐れっぽいパフォーマンスの最中に身動きがまったくのところで出来なくなるのでした。

食べ物は尚のこと‘強迫 obsession’でありました。そして彼は絶えずそれを探し廻ります。今では彼は固形食を食べており、自分一人でも大丈夫です、彼は文字通り食べ物、水やら飲み物を口の中へと投げ込み、それらを瞬く間に飲み込んでしまうのを私は観察してまいりました。これは水や他の飲み物の場合は殊更にそうなのでした（固形物を口にする場合には、こうした行為といつもの舌を口のなかで巻いたり擦り付けたりなどをしております）。つまり彼はそれらを信じられない素早さで口の中へと放り込むのです。文字通り一瞬であります。それからもしチャンスがあれば、彼はしばし

ば飲み終えた後プラスチックのコップを力いっぱい遠く目掛けて放り投げるのでした。食べることで何かを口に入れることは、彼にとって決してゆったりとしたプロセスにはならないようでした。まるでそれは、彼がそのプロセスを意識する間もなしに一瞬にして起こらねばならないといった印象でありました。そして彼は突如として飢えも渴きも覚えず、もう何も要らなくなるのです—しかも今さっき摂取したところのものを何ら覚えていないふうで—コップは視界から遠ざけられてしまうのでした。

父親を除いては、彼は人々が来たりいなくなったりにはまるで無関心のようでした。それには母親も含まれております。彼の‘筋肉質’の運動能力はどんどん著しいものとなり、これはどうやらその後の彼を印象づけるものでありました。彼はこの点ではその年齢からして著しく発達が進んでいたわけですが、それもいかにも不自然で、怪物的ですらありましたし、いかにも異様ともいえたのであります。彼はほとんどのところ決して膝を屈することがありません。何か床のものを拾うのに<sup>かが</sup>屈む場合でもそうです。これはその歩きぶりにいかにも機械的なロボットのようなクオリティーを与えました。恰も、彼はメタルで出来上がったみたいなのです。それでいかにも硬直した<sup>き</sup>錆び付いたジョイントのせいで、調和のとれたふうに膝を曲げるといったことが出来ないみたいなのです。彼は、‘支える’とか‘防御する’といった考えを何ら持ち合わせいない、もしくは彼自身のなかに同化されていない、もしくはそもそも彼の身体にそうした考えがまるで無い印象なのです。恰も誰一人として、彼を抱き上げたり、それでこけて痛い目に遭うだろう彼を防いであげるといったことなどなかったみたいで…。また彼は、2つの別々の部分が、あるいは2つの別々の実在物が、調和よく一緒に働くといったこと、もしくは2人の人が一体となって一緒に繋がってゆくといったことにも何ら考えが及ばないようでありました。彼の異常に発達した筋肉質の運動能力、そしてその歩行の並ではないスピード力は、彼を人々からそして居たくない厭なところから逃げるといった目的に叶うものとなってゆきました。彼は今やごく簡単にすぐにものごとを放棄してしまうのであり、そうした折は実に迅速にそうするのであります。

彼は11ヶ月の頃、母親が妊娠しました。そしてこの事実は彼が逃げるわけにはゆかないことでした。それが彼にもたらした主なるインパクトというのは、彼が物体の‘内側 inside’というものに興味を<sup>あら</sup>露わにしたことにかがわれます。それまでは、物体の表面のみにしかほとんど気がゆかないのを観察していたわけでありました。彼のお気に入りのゲームというのは、一つのを別のものに並べるとか、それら表面を互いにくっつけるとかでありました。しかし今や彼は、物体の‘内側 insides’に興味を覚え始めたのであります。恰も母親のからだの内側が別の赤ちゃんによって占められていることを理解しているかのように…。彼は自分の頭を彼女の恥骨もしくは彼女の胃の辺りに向けてぶつけます。彼は古い洋服ダンスの中に身を隠し、そして文字通りその真つ暗闇のなかに、まるつきり封印された御棺のなかの遺骸のように身動きせず、じっと何時間もそこに居続けることがありました。

私は、ここに赤ちゃんTについての詳細な観察記録を長々と引用したわけではありますが、この子については2年以上に亘って毎週規則的に観察がなされております。またその後6、7年の間、観察者は折々経過観察のため不定期に訪れております。最初の1年目には、彼は「二次元的な状態」にいる

子どもといった痛ましいイメージを呈しておりました。情緒を経験することを極度に恐れ、そして自らからであるために早熟ともいえる‘二次的皮膚’的な運動性を発達させていたといえましょう。T夫人自身は極めてまとまりを欠いた印象で散漫で、すべてが場当たりの、文字どおり‘心ここにあらず’といった趣きでありました。

この1年後、観察者は赤ちゃんTが話せるようになるものかどうか、教育の可能性についても大いに危ぶんだのであります。しかしながら、その2年目に幾つか言葉らしきものを発するようになります。最初はモゴモゴと聞き取りにくいものでしたが、それから徐々にたくさんの語彙そして模倣によるところの言語的才を習得してゆきます。彼は学校に行くようになり、それまでの著しくメカニカルで物真似の鸚鵡のようなありようでしたが、結構‘お勉強のできる子ども a good scholar’になっていったのであります。

さて、この観察に引き続き、さらに「インファント・スクール」に通う或る幼い子どものセラピイの記録の抜粋をご紹介します。その子どもの母親はまた彼のニーズに対して受容的であることが不可能にみえました。そしてこの子は赤ちゃんTとは僅かに違った種類とはいえ、非定型な発達に陥っておりました。しかし赤ちゃんTにも似て、経験を抱え、そしてそれを「考える」といったことは残念ながら出来ない子どもであったのです。

## 《臨床例：ピーター》

ピーターは5歳半の男の子であります、「チャイルド・ガイダンス・クリニック」に校医から勧められ来所いたしました。彼は人との関係が結ばず、孤立しがちで勉強にも打ち込めません。並外れて他の子どもらに攻撃的になることがあり、突如顔にけいれんさせるやらビクッと腕を急にあげたりするのです。クリニックに於いて2回に亘る診断面接が行われました。一回目は母親の坐っている椅子の下に潜り込んで、折々にいかにも恐ろしげにイナイナイバーの遊びをします。その次のセッションでは、なんと壁に這い上がろうとしたのであります。それも必死の形相で両腕と足を使って壁に跨り、動物的な悲壮な声やらもしくはマシン・ガンの猛々しい騒音を立てます。

母親は、これらのセッションの間ずっとピーターには何ら問題はないという見解でした。そして、こうした彼の行動—それは一見とても普通に思われたわけですが—は正常であるし、男の子なら誰もやりそうなことというわけです。彼女にとって唯一心配の種といえたのは、彼の尿漏れと夜尿でした。それについてはとても気に病んでおり、為すすべなしとお手上げ状態しつけであったのです。彼女は彼をまたがるのを諦めてしまっていることを認めました。何も言わずにただ着替えをさせていたわけです。彼女は他のどんなアプローチも考えられず、また試みることもなかったわけです。セッション中、彼女はピーターに関係づけることはなく、彼の方もまた同じく彼女に関係づけることはありませんでした。母親については、その態度・振る舞いにまるで何とも死んででもいるような‘平坦さ’があり、それが大いに気掛かりに感じられま

した。彼女がピーターの言うこともしくは為すことに対して熱心になるとか反応してあげるなど、とても想像できないといった感じでした。しかし彼の行動、それが珍奇であろうと正常であろうといずれにしても、同じ当たり障りのない、ぼんやりとした態度で取り扱うだろうということは充分察せられたのであります。

2回目のセッションの終わり頃、当初防衛的だった態度は攻撃性へと反転します。彼女は怒り始め、次回の予約を取ることを拒否したのです。それから彼女との接触は、ごく限られたものとなりました。その頻度にしてもまた介入の試みられる深さにおいても…。そうしたことの結果の一つとして、われわれはピーターの早期の生育歴については実際的に何も知らされないままであります。誕生後の最初の一年間、彼がどこか落ち着かない眠りの浅い子どもであったということ、それに母親が陳述しますところでは、彼の発育はすべて正常に切り抜けてきているといったこと(その‘正常’という意味が彼女にとって何であったかはともかくとして)、それがすべてであります。

学校は当然ながらピーターについて心配を募らせてゆきました。殊に他の子どもらへの攻撃的ないじめがあったからです。学校側から、ピーターはそわそわと落ち着きなく、顔をひきつらせ、そして喘いだり、ぶつぶつ言うなり、呻き声を発したりするといったことが報告されております。かなり深刻な動揺を来している男の子であり、彼と交流する羽目になった大人の誰にしても憐憫の情、それに何とか助けあげたいといった反応を喚起させるものを持っていたわけであります。それもどうやら彼の母親を除いてということになりますが…。

こうしたことを背景にし、私が再び介入することとなり、週ごとに学校で彼に会うことを提案したのであります。それは彼の母親を巻き込まずということが前提でして、彼女はこれに同意したのです。

セッティングは、想像を絶するほどに理想的とは程遠い状況でした。まったくのところ支えられていないわけではないとしても…。両親に対しての、もしくは両親からのサポートは一切ありませんでした。そしてピーターの行動を理解するため取り敢えず‘所見’を構築するために必要な彼の生育歴も知らされることはなかったわけです。われわれが一緒にいられる時間は学期中に限られており、ハーフ・タームなどの学校の休み期間、そして野外授業やら、先生方のストライキやら、クリスマス・パーティ、運動会など、それらはまるでわざとセッションの時間にぶつかるといって計画されているかのように見えたほどであります。それでその都度セッションは中断されることになっておりました。われわれは2年の間、部屋替えを3回、しかもその部屋には折々の思いがけない家具やら設備のあれやこれらが運び込まれるといったために格闘を強いられたわけであります。さらにはセッション中にも邪魔が入ることがあったのです。先生そして他の子どもら、窓の清掃員、配管工が突然部屋に侵入して来たり、そして聴覚的にも電話、テレビ、そして学校全体の騒音のあれやこれらによってもであります。唯一の継続性を維持するための‘安全地帯’といえるのは私自身であり、彼の玩具箱でありました。その箱は私と一緒にセッションに持ち込まれ、そしてセッションの終わりには運び去られることになっておりました。

この2年に亘るピーターとのセラピーについての記録を、その始まり、それからその後についてもあちこち抜粋して引用することにいたしましょう。その描写されたものは、考えることも遊ぶことも出来ない子どもといった生々しい臨床像であります。ビオンの「ベータ・スクリーン」の投影という言葉において考えられているもの—すなわち‘未消化で未思考の感覚的印象のダム’といったものをここで伝えられるかと思われます。彼は、またミス・ビックのいうところの、その外界並びに内界のいずれに於いても抱えられていない状態を補うために何らかの行動をするやら躁音を立てるやら、そして顔をしかめるやらで、自らを‘筋肉質的に’一つにまとめることをしていると認められるかと思われます。セラピーのフレームワークは、場所、時間、そしてプライバシーという観点からいってもコンテインされているとはとても言い難いものでしたし、適当と言うにはほど遠く、実にお粗末であったわけですが、そうした限界の中にあっても、セラピストは次の2年を掛けて、そうしたしばしば不慮の邪魔が入ったとしても、絶えず注意が注がれ、そして興味をもってくれる誰かが傍<sup>そば</sup>にいてくれることが、病的に頓挫している発達状態の子どもに、世界が彼に及ぼすところのインパクトに対して彼自らが感じることを思考しかつ意味づけるうえで何らかの助けとして活用されるということを示していったこととなります。

ここでピーターのセラピーの記録を語りましょう。私は、始めからピーターがまるで溺れる者が藁にもすがるようにセッションに飛びついたと感じました。そして殆どすぐさまたくさんの意味そして情緒的な温かみを帯びてまいりました。そういうわけでしたから、多くの難があったにも拘わらず、セッションの休みの間も何とか彼を繋ぎ留め、そして私との接触を維持することも辛うじてできたように思われます。

最初の3ヵ月の間のセッションにおいて、当初の奇怪ともいえる行動にも似て、多くのことがいかにも何ら意味をなしていないもののように思われます。しかしながらセラピストは、彼が彼女の存在を敏感に察知しているということを感じていたのです。遊んでいるとしても、もしくは彼女に向けて何らかの行動をしていたとしても。彼自らが直接彼女に語りかけることはまるでなかったわけですが・・。最初の夏にセッションのお休みの時期があり、学校が替わり、部屋が変わりといったことが立て続けに起こり、それはほとんど耐えられないほどのプレッシャーであったわけですが、それらが終わった頃によやくのこと、彼は彼女に驚くほど話をし始めたのであります。そして彼女に彼が後に言うところの「心の図 mind picture」を示し始めたのであります。その最初の一つは、彼の箱に気が集中したわけですが、彼女によってそれは‘ママの心とからだ’が表象されていると解釈されておりました。それは以下のようです。

彼は2つの小さな男性人形を取り出し、それらを箱の脇に置く恰好で手でぶらさげます。彼らは入室を拒んでいる箱の中に入ろうと躍起になっていたのです。悲鳴をあげ、その悲嘆は極まってすすり泣きをしておりました。彼らは、雄牛、カバ、ライオン、ホッキョクグマ、そして象がなだれを打つように彼らめがけてやってくるので、まさにそれに踏んづけられそうなのでした。そこで、私は次のように示唆ます。すなわち、それはまさに赤ちゃんがオッパイを飲んでいるときの‘図’であるということ、全然ママのこころの内に抱えられず、そしてその心の外へと赤ちゃんはうっちゃっておかれているわけます。またその一方で、同時に下のお尻の方に於いて攻撃されているとも感じているようであります。すなわ

ちそれは彼がオツパイに対して侵入的であることで罰され、その結果彼の‘投影’が敵意を帯びて彼へと投げ返されるといった事態が語られていたのであります。

ここでどうやら、ピーターの早期の‘探索’に対しての母親の反応が全面的に欠如していたということが容易に推測できるように思われます。つまりそれが、彼の「投影」のニーズというものが劇的に加速化されてゆくことへと導かれていったといえそうです。

ピーターは、部屋のなかでセラピストに近い安全な位置から始めました。そして週ごとにそして月ごとに、その安全な領域が広がっていったわけであります。セッションの途中にさまざまな中断やら邪魔が入り、それで彼が圧倒され、まったくのところフリーズの状態に陥ることがあったにしろ…。徐々に彼はそれらについても話しかけるようになります。＜電話の音なんて、ぼくたち全然気にしなくていいよね。そうでしょ？ぼくらとは全然関係ないんだもの。＞しかし彼がこうした‘割り込み’をそこそこ落ち着いて受け止めることができ、セッションがセラピストのコントロールできない何らかの出来事のせいで中断されるといったこともあると認められるようになるまでには、彼は繰り返し怒りをぶちまけ、彼女に悪口雑言を浴びせかけるといった時期もあったのであります。それは次のような具合でした。

‘ママの宇宙船’と呼ばれていたものがセッションの間知らぬうちに箱の中で壊れていたのであります。それは私の関知しないことであつたわけです。それをセッションの始まりにピーターはすぐさま目敏く見つけます。彼は、確かにもっともながら、ひどく憤っておりました。＜おまえなんかもうまったくどうにもならない。臭くて馬鹿で…。何もまともに世話できないじゃないか。ほら、出来なかったよね—わざとこれ壊したんだ。おまえはそれをおまえの言葉でそれをやったんだ。—おまえのことばはものをメチャメチャにぶち壊しにするんだ—だから黙れ、黙るんだ…。＞

たぶんここでは彼が私と一緒にどうにか言葉を使う前に克服されねばならなかった不安感がうかがわれます。すなわち、それらはそれ自体危険だということなのです。それらはまるで大槌<sup>おおつち</sup>のように何もかもをぶち壊しにしてしまうのです。それらの良きことばもしくは悪きことばの持つパワーは圧倒的に強烈であるようです。そして彼の‘つらく当たり散らす’言葉に耐える私側の能力はこの段階でとても重要であつたわけです。彼がどんなに私目掛けてかなきり声をあげようと、ことばを理解し、そして意味づけるために、そしてそれから逸脱しないためにも、言葉は尚も使い続けてゆかねばならないのです。そうするなかで言葉の万能感は取り除かれていったようでもあります。その2週間後、セッションの最後に、彼は、‘宇宙船’を片付けながら、＜ぼく、自分のこともきちんと片付けなくてはいけないね。気をつけなきゃ…。なぜって、もし自分がそれをきちんとしないで、どこかに失くしてしまうとしたら、ぼく辛いから…。＞この意味するところとは、自分の行為に責任を引き受けることであつたようです。そしてそこには、「言葉」はそのように彼を慎重で考え深い人にさせるといった彼の考えをも語られているようでもあります。

ピーターは、彼の言うところの‘ぼくのみステリー’を理解するうえでセラピストから援助されていることを言語的に評価するようになっておりました。彼が彼女に<ぼくね、しなくちゃならないこと work がいっぱいあるね>と言ったわけですが、確かにそのとおりなものでした。

赤ちゃんTとは違って、己の世界をなんとか意味あるものにしたい、そして自らの真実を学びたいといった衝動に溢れる子どもをピーターのなかに見ることができましょう。分析的セラピーにとっては理想的とはまったく言えない状況にあっても、かなり短い期間に驚くべき進歩を遂げたのであります。彼は、己の内なる‘のみステリー’を気づかせ、そしてそれらを理解することを努めるようにと彼に働きかけるセラピストの‘考えるところ the thinking mind’をとおして、それ以前に欠如していたコンテインメント(包容)を活用し得るようになっていったものと考えられましょう。

さてここで、「乳幼児観察」からの記録抜粋を一つご紹介いたしましょう。ここでは母親との関係性はまったくのところ何ら見込みがないとされる状態で始まったといえます。母親は明瞭に出産時に心的外傷を受けており、機能不全が著しく、アイデンティティーの感覚も欠落していたといえます。それは赤ちゃんの誕生の時点において既にそうであったわけですが、その誕生をととても待ち望んでいたのにも拘わらず。。。

## 《観察例：赤ちゃんロザリー》

ロザリーは、30代前半のご夫婦の最初に誕生した赤ちゃんです。それ以前の数年間おそらく<sup>のうしゅ</sup>嚢腫が母親の妊娠を妨げていたようでもあります。両親揃ってそれぞれキャリアを持っていて、それは極めて順当な印象があります。父親は起業家であり、そして母親は福祉のフィールドに於いて指導的立場にありました。産休を終えたら、赤ちゃんを日中ナニーに預けて、すぐにも職場復帰することを心に決めていたのです。

観察者並びに観察グループの面々は、この彼女の決意を聞き、不安を覚えます。また母親のビジネス・ライクな、そしてどこかしら軽々しい話し方、例えば、分娩時に<どっちもが身動き付かなくなっちゃったの。。>といったことや、詰まりのところ彼女の骨盤があまりに小さくて、それで帝王切開しなくてはならなかったという次第を語っていたわけですが、それ以後もその初めの週やら月やらを経てゆくなかでも赤ちゃんについて語られるその様子に何やら不安を覚えさせられたわけでもあります。母親の生きることの意欲並びに職業的な熱意というのを、その赤ちゃんを身体的かつ精神的に抱える能力に較べますとどうにもかなりの不一致がうかがわれます。赤ちゃんは恰も人間といったふうではなく、どちらかという壊れ物扱いの小さなお荷物といったふうで、気を付けて世話がなされ、授乳もされ、入浴もさせてあげて、おむつも取り替えてあげるといったふうでした。最初の数ヶ月の間、彼女は母親によって話し掛けられるということがまるでありませんでした。彼女についてその身体面でのケアに関連しての言葉掛

けは交わされていたのですが…。赤ちゃんの世話の一切は、白い制服を着たナニーの選択に委ねられておりました。どうして白い制服なのかの理由は、彼女が母親と取り違えられないようにといった配慮からなのです(恰も母親は、自分にアイデンティティーと役割を与えられるためにも、幾らか外見からして区別されることを必要としていたということになります。)

観察者は、赤ちゃんが母親を見詰めるといったことは滅多になかったと記録しております。彼女の眼はむしろ母親から背<sup>そむ</sup>けて、光とか壁の表面に固定されるのです。もしくはただぼんやりと空を見据えているといった感じです。事実、母親はまるで赤ちゃんをまともに直視することができないといった感じなものでした。彼女はとても観察者に対して友好的であり、歓迎してくれたわけですが、それも彼に話す必要があるためといった感じで、彼が赤ちゃんに注意を向けるのをむしろ嫌がるふうなところがありました。彼女は仕事のことをあれこれ、年寄りたちの病気やら死といった物語、そして象のような真っ黒い病気の赤ちゃんの話<sup>話を</sup>を次々とまくしたてるのでした。彼女の気さくな印象そして自信ありげな様子<sup>の様子</sup>の底に見えてきたのは、どうやら彼女が誕生させた赤ちゃんについての不安感、そして外傷的体験ともいえる出産についての不安感が透けて見えており、それが彼女にその今や自分の赤ちゃんとなった子どもに接して親しく馴染みあうといったことを極めて困難にしていることは明らかでありました。年寄りたちそして彼らが死んでゆくといったことに気を奪われているのは、彼女の父親がその何年か前に癌で死んでおり、そして今や残された老いた母親が心配だということにどうやら関連しているようであります。だがそれにしても明らかに彼女の‘内的なイメージ’でありそうです。なぜならそのお祖母さんが観察中に訪ねてみえたとき、彼女がとても若々しくお元気であったからです。

真っ黒な象み<sup>のうしゅ</sup>みたいな赤ちゃん<sup>のうしゅ</sup>と手術で除去されねばならなかった彼女自身の<sup>のうしゅ</sup>嚢腫は関連性がありそうです。さらには、彼女自身の幾らか原始的かつ苛烈な貪欲的クオリティーがロザリーに投影されていることにもそれは関連しているでしょう。母乳を与えることは結局のところ全然嬉しいことにはならなかったみたいでして、それは5、6週目ごろに断念されております。この件では残念ながら義理の母親に助けられたとはいえません。何故なら彼女は泊まりがけでやってきて、そして断固として母乳哺育に反対な旨を語り、そして赤ちゃんがお腹すかせているとみると、いそいそと赤ちゃんを抱っこして哺乳瓶を与えることをしたからであります。R夫人は或るとき、ちょっと沈んだ面持ちで、<皆さんは赤ちゃんに母乳を与えると親密な感情を抱くのでとても役立つと言うのを聞きますけれど…>、でも彼女自身の母親は、どの子どもも3ヵ月ぐらい経たないと密着した感情を抱くことはなかったと語っていたんだそうです。ここから、R夫人がこの最初の数ヶ月の間娘のロザリーに親密な感情を抱け<sup>ない</sup>でいたことに、成程と幾らか光が投げかけられたわけ<sup>であります</sup>。

母親が観察者に、母親というのは赤ちゃんが18ヶ月から2歳になるまでは大して重要ではないと語っております。そして<それまでに問題となるのは身体的なケアだわね>ということでしたが、でも繰り返し子どもにとって自分が絶対不可欠な存在になっては困るとか、そうなると仕事に復帰するのが難しくなるといった不安感を吐露しているのには矛盾があります。そうした理由で、彼女は夫に哺乳瓶で赤



ちゃんに授乳できるように奨励し、そんなふう<sup>に</sup>に他の誰かに赤ちゃんの世話を委ねたのであります。どうやら赤ちゃんのニーズによって惹起されたところの自らの‘幼兒的無力感’で行き詰まってしまうのを彼女はひどく恐れたように見受けられます。

彼女の観察者への会話はしばしば赤ちゃんについてということよりも仕事のことが多かったわけです。その領域に於いてですと、彼女は大いに自信もあり、自分が明らかに有能であると評価されていると感じていたのです。ところが赤ちゃんのことに なりますと、読書し、そしていろいろ赤ちゃんグッズを取り揃えていたにも拘わらず、彼女は情緒的にまったく途方に暮れており、そして明らかに—彼女は軽妙で、かつ洗練さを装って<sup>も</sup>いたにも拘わらず、一度ならず率直に認めたことがあったわけですが—内心では極めて怯え<sup>おび</sup>きっていたわけ<sup>で</sup>あります。

赤ちゃんロザリーは、運良くもとても吸い付きのいい子でした。それに彼女が動揺をきたしたときにはそれをそのまま感じてもらう<sup>す</sup>べも心得ていたと言えます。或るとき、そうした彼女の泣き声がひどいとき、R夫人は白状したのですが、電気掃除機をオンにしてその泣き声を消す算段を試みた<sup>と</sup>いったことがあった<sup>んだ</sup>そうです。ところが、やがて掃除機をオフにするのに隣の部屋から戻ってきますと、赤ちゃんはまだ泣きやまずにいた<sup>という</sup>こと<sup>で</sup>した。

最初の何週間か、ロザリーの無反応で虚ろなまなざしが観察者には気掛かりでした。そして母親が職場に復帰した際には、さらなる内向(引きこもり)がありはしないかといった陰鬱な予測がされたわけ<sup>で</sup>あります。雇われたナニーは、学校出たばかりの若い女性でしたが、幼い子どもらの世話の経験はあり、慣れているよう<sup>で</sup>した。母親は、仕事に戻るのを2週間ほど延ばして、彼女が落ち着くのを待ちました。観察者が始めてナニーと一緒にロザリーを観察したとき、彼女が実にリラックスして赤ちゃんのからだにぴったりと寄り添い抱っこし、哺乳瓶を与えている様子に驚かされたのです。彼女は赤ちゃんと身体的に実にしっくりしている<sup>みたい</sup>でした。それは、家族全体の空気が、そして赤ちゃんそれ自身においてもまた、徐々に変化してゆく前触れ<sup>で</sup>ありました。

ナニーが来てくれたことは夫人にとっては大いに救い<sup>で</sup>ありました。若い、まだ経験豊富とはいえない若い女性にあれこれ指示を与えたり、働かせることには実に自信ありげ<sup>で</sup>ありました。彼女はそうしたことに仕事柄とても得手<sup>であ</sup>ったわけ<sup>で</sup>す。彼女は読書から赤ちゃんの育児についてたくさん知識として持っていたわけ<sup>で</sup>すし。一方、ナニーは(たぶん部分的には赤ちゃんへの責任を全面的に引き受けねばならないわけではない<sup>せいか</sup>)、赤ちゃんの感情に寄り添い、ロザリーにより接近することができ、そして母親に赤ちゃんのしていることの意味を告げることをしたわけ<sup>で</sup>あります。このようにして彼女は、実に巧みに母親を赤ちゃんに情緒的に近づけさせてあげられることができたこと<sup>に</sup>なります。やがて迅速にロザリーは周りのものに敏感に察知するようになり、生き活きとして反応的<sup>で</sup>あり、かつ彼女の注意をナニーのみならず観察者にも向けるようになっていきます。そんなふう<sup>に</sup>に事態が変わってゆくのが認められたのです。彼女はまた、母親に興味をますます覚えるようになり、その母親を他の誰よりも好いて<sup>いる</sup>と

いったことをはっきり示すようになり始めます。母親が彼女のことを忘れていて気づかないときですら、赤ちゃんの口ザリーは彼女の注目を引き付けるように努力しようとしました。ナニーは、母親にそうしたことを指摘し、気づかせてあげることもありました。

父親はずうと赤ちゃんに心奪われていたのでありますが、身体面で赤ちゃんをどう扱えばいいのか不確かでありました。彼は、妻に比べれば、情緒的には関わることはできたわけですが、実践的にはどうもあまり役に立つともいえなかったわけです。そこで彼はナニーに、赤ちゃんに対してのよりナイーブな驚きと魅了される思いを分かち合うことの出来るもう一人の誰かを見出したこととなります。赤ちゃんはとても活気づいて、魅力的で人見知りせずにぐんぐん関係の輪を拡げてゆきました。観察者にとっても（幼い子どもやら児童には殆ど経験はなかったのにも関わらず）、彼女の行動、その表現性そしてその声音が伝えるところの、実に並外れた複雑なメンタル・ライフに真底心打たれ、その感動を思わず声にはいられなかったのであります。その後赤ちゃんが7ヶ月になった頃、ナニーが家族の許に帰らなくてはならない事情ができて、それで職を辞すということが告げられました。そして3週間ばかりの間に、もう一人新しいナニーが募集されたわけでありました。

その最初のナニーは、最後の週になる頃には赤ちゃんに対してどちらかという控え目に距離をもって振舞うといったふうでした。明らかに別れが辛くて、自分の感情にどう始末をつけたいのか困難だったといえましょう。父親は、彼女が去ることを別に大したことはないかと否認しているかのようで、陰では彼女に敵対するようになります。ところが、母親は意外にもそれが赤ちゃんにとってどういうことを意味するのかを察知したようなのであります。ナニーがいなくなることを哀しく思う<sup>かな</sup>というのは確かではあったわけですが、その一方で彼女はもっと赤ちゃんに情緒的に自らを与えるようになっていったわけです。赤ちゃんに話し掛け、そして一緒に辛抱強く遊ぶ<sup>かな</sup>ということをし始めたのです。そういうわけで、観察者にとって驚きであったわけですが、ナニーが交替したことで赤ちゃんに何ら情緒的な内傷は認められませんでした。新しいナニーは、やがてどうやら赤ちゃんに受け入れられたようでありました。それも最初じろじろと吟味するような目付きをしてしばし彼女を眺めてたわけですが。でも最初のナニーのことを決して忘れたわけではなかったのです。例えば、R 夫人が観察者にごく普通に最初のナニーを話題にしてその名まえを告げたとき、授乳されていた口ザリーが突如として声を張り上げ泣き崩れたからです。

赤ちゃんが最初の誕生日を迎えようとしていた頃、観察者とセミナーの面々は、彼女の発達について討議しながら、誰もがびっくり仰天いたします。その最初の躓き<sup>つまづ</sup>を考えますと、赤ちゃんと母親の間にかくも幸福で愉しげな関係性が培われていっているのを見て大いに悦んだわけでありました。そうした状況からうかがわれますことは、母親が職場復帰をすることで大人としての自信 competence、そしてアイデンティティーの感覚を取り戻す必要があったということでもありましょうし、また彼女はナニーを、自分の妹みたいに、子どもに対する責任を分かち合うことで助けられる必要があったということでしょう。それで彼女はどうか自分を建て直しそして支えられ、赤ちゃんの‘投影’に対して情緒的に受容的であることができるようになっていったということのようでありました。

こうした状況では、観察者がまた母親の不安感の‘投影’に対しての「容器 receptacle」として、また赤ちゃんにとっても信頼できる、傍らで見守ってくれている注意深い人物として存在していたと言ってよろしいでしょう。ナニーそして観察者のいずれもが母親がアイデンティティーの不一致の感覚から立ち直り、心の内に子どもを包み込むスペースをさらに付け加えるべく援助していったものと思われる。

さて、次に分析症例をご紹介します。若い男性で、双子の一人でありまして、豊かな情緒的な潜在的な能力があるものの、親密な関係性のなかで情緒を表出することを育みかつ促してくれるような「母親的对象 a maternal object」を内在化する能力が抑制されていた方です。

## 《分析症例; G》

ドクター・G は恰幅のいい、エネルギーで聡明な若い小児科医であります。学校時代からずっと成績がよく、医師としてのキャリアもなかなか順調といえます。彼は双子の一人として生まれました。親は上昇志向の強い起業家のご夫婦で、やがてそこそこ裕福で揺るぎない社会的地位を得ていったこととなります。彼はその最初の子どもであったわけです。双子の兄は結婚し、そして両親と同様に成功しております。その下の弟はどちらかというとパツとしないタイプで、仕事上もまた親密な社交的関わりに於いてもなかなかうまくゆかないようであります。生い立ちの早期では、彼と双子の兄とはいつも離れがたく一緒に、どちらかという‘二人で一人’といった感じで振舞っていたようであります。例えば、二人三脚競走では、そうした理由もあって、絶対に学校中の誰にも勝ちを譲ることはなかったということでした。

G は、11歳になった頃に自分の個室が欲しいと心を決めます。毎日勉強のため長時間引きこもるつもりでいたわけです。そうしたことが功を奏して、彼はその学業成績に於いていつも全ての学科で首位を守り続けたわけです。それは彼の兄をはるかに凌ぐものであります。兄の方は、能力的には彼とさほど違いはないものの、学業面において彼ほど野心はなかったのであります。G は今や家族のなかではアカデミックでかつ専門職の成功者といったわけであります。彼が分析を求めてやってきたのは、結婚しないのは何か自分によろしくない何かがあるのではないかと恐れたからであります。彼は女性とはうまく付き合えるのです。殊に年上の女性です。しかしどの女性に対しても永久的にコミットすることにはひどく気後れを覚え、慎重であったのです。

彼が分析を受け始めたころ、自分一人の小さな住まいに引越しをする予定にありました。それまで何年も他の人達とフラットをシェアしていたのです。彼らに対して友好的でありましたが、しかしを別の誰かとそうした狭いところに一緒に暮らすことがもうんざり飽き飽きしてきていたのです。彼は仕事を終えた後、誰からも干渉されない自由な時間が欲しいと決意したわけであります。

最初の数ヶ月、彼は分析に強い抵抗を感じております。自己内省にはかなり意欲もあったわけですし、事実とても協調的であり、そして折々に夢を持参してきました。しかしそれを私に語ることをひどく嫌がったのです。彼は洗脳されるのではないかと疑心暗鬼で、そして十分に懐疑的でありました。彼はしばしば私を叱責するばかりの母親として経験していることを認め、戸惑いを隠せませんでした。6ヶ月を経過した頃になりますと、どうかそうした抑圧された転移は大いに解消されてまいります。それに彼は事実として自分が以前よりもはるかに人生を愉しんでいるということに突如気づいたのであります。自分の仕事にしても、本質的な価値あるものとして、彼の野心の道具というのではもはやなくて、ますます懸命に携わるようになっていくことを認めるに至ったのであります。それ以上に、彼は時々自分の分析セッションを待ち望むような期待感を覚え始めたのであります。

やがて次第に時を経るにつれ、絶えず人目を引こうとし、競争的で、常に優位に立とうと躍起になる自分を敢えて人前に誇示しているのは、実は心の内の圧倒されるほどの感情、そこには彼が責任のある、そして治癒し得ない病人に対して抱くところの慈愛、そして嘆きも含まれていたのでありますが、それらを断じて見せまいとする‘盾’であるということが明らかになってゆきます。几帳面で、ひじょうに用意周到で堅苦しい医師であり、超過勤務も厭わず、病院で遥かに必要以上の役割を担っていたわけですが、それは否応なしに多くの出来事に巻き込まれることになるわけです。そしてこれこそが、両親に絶えず付き纏われることから彼を守っていたということになります。彼は彼らの人生は損なわれており、かつ大して充たされてもいないと感じていたわけです。目下彼の母親は病気で、それも進行性の麻痺を抱えておりました。彼女はまだまだかなり若いとも言えたのですが、それに彼の下の弟は健康の衰えが著しく、虚脱状態にあったのです。彼は母親そして弟のことで深く心を痛めておりました。そしてまた母親が弟の病状にこころを痛めているのを察して、<医者になったって、自分の家族すらどうすることも出来ないとしたら、意味なんかあるもんか・・・>と語っております。しかし彼は自分の時間とプライバシーが侵害されることを警戒し、絶えず慎重でした。彼はまだ多くの点で、前思春期の頃の記憶のまま、つまり兄の部屋から身を退け、そしてかつて情熱を向けていたラグビーのフィールドからも身を退け、彼固有なる存在というものについて考え、それにどうか‘輪郭’を見定めようとして一人で歩き始めた頃の少年そのままであったわけです。

ドクター・G は長い夏季休暇の間に一連の夢を見ました。《彼は、壁窓から突き出た棚に身を置いて、教会か、もしくはクリニックのような大きな建物のなかへと入り込もうとしたおります。上の階へと続く窓を通過して・・・ちょうど靴を建物の中へと踏み入れんばかりにしていたそのとき、病院の医師の一人が、それもいつも彼の前に立ちはだかり邪魔して、彼の神経を逆撫でする医師なのですが、その彼が居たのです。その建物の内側から水が流れ込んできます。》

この夢の中の医師は、几帳面で何でもすべてをよく知っている know-it-all 有能なタイプで、仕事もひどく手際が良く、決して非難されることのない人でした。水は、前のセッションで、彼の家族の親しい

友人の或るご婦人が病気であることを語っていたとき、思いがけなくも涙が止まらなくなり、そのことが彼の気持ちを圧倒したということが連想されました。彼女とその夫は、彼がとても好いているご夫婦でしたし、とても尊敬の念を覚える人達だったわけです。彼の嘆きの想いは、妻の方だけではなく夫の方にも向けられました。彼女は近々手術が予定されており、それから死ぬかも知れないとの一抹の危惧があったからです。

それから、或るセッションでのこと、彼はまったくのところ困惑させられておりまして、それは彼のコンサルタントからそれとなく、僅かながらも不注意があるとの指摘がされたからです。そのセッションの後で次なる夢を見ました。《彼の父親がはしごに乗っていて、屋根の修理をしておりました。釘を屋根に打ちつけたり、あちこち手直しなどもしております。分析患者の彼自身はどこか別のところに居るようです。そしてどうやら自分の用事に掛かりつきりになっているようなのであります。》

この夢の連想で、彼は母親が子どもの頃に泣いていた記憶が蘇ります。それは樹木が倒れて、屋根が潰れたのであります。それからもう一つ、前の晩に彼女から電話が掛かってきて、無感動と抑うつに陥っている弟のことを訴え、どうにも為すすべがないと泣いていたという事実が語られました。

その次の夢は単純なものでした。《彼は母親とハウスをシェアしようとしています。彼ら二人は一緒に暮らすということになっているようであります。》

教会もしくはクリニックに入り込もうとした夢は、夏季休暇の間分析セッションから締め出されたということに明らかに関連がありましよう。そして神経を逆撫でする、何もかもご存知といった医師とは、彼を中へ入れようとするのを阻むところの、‘私の夫’、つまり父親を象徴しているでしょう。しかしこの父親は、彼自身の何ごとも正確にこなす、有能でかつすべてをご存知といった側面の投影を帯びているともいえましよう。この人物が建物の入り口近くにいたということ、つまりその表面 surface です。そしてまた彼は水が—すなわち情緒性—が漏れ出ているのを見たということが殊更意義深いものに私には思われました。この意味するところは、彼の‘すべてご存知といった性癖’は脆く出来上がった「二次的皮膚」—そのようにミス・ピックが名付けたわけですが—もしくは「外骨格 exo-skelton」(ビオンのことばを引用すれば)ということになりましよう。より優位に立つ対象との投影同一化に起因したところの、深い自己愛的な状態ではなさそうです。この建物それ自体の性質は、クリニック、彼の仕事を表象しているわけですし、教会というのは組織だった宗教における安全弁を象徴してもいたわけです。永年彼は幼い頃から宗教をいくらか疑いなしに受け入れており、それを自分ではどうしようもない情緒に対しての既成の防波堤として見做していたといえましようし、つまりそれはもう一つの「二次的皮膚」といってもよさそうです。

もしわれわれが最初の2つの夢を繋げますと、そこに示唆されるのは、自分ではどうしようもない情緒というのは‘オッパイへの損傷’(窓、屋根)に関連づけられるということでありましよう。そして弟への損傷と

いうことでもあります。母親を損なうものとは‘夫婦間の性交’ではなさそうです。樹木が屋根に倒れて損傷を与えたといった場合、おそらく彼の児童期の‘理論’ですと、そのように捉えるでしょうけれど。しかしどうやらむしろ彼自身の幼兒的な‘自制できない’ことが問題だったように考えられます。これは帰るところ、コンサルタントが不注意、つまり配慮を怠ったということとそれとなく諷めたことで、彼がそれを正当と認め難いと大いに心傷ついたことにも関連しております。夢の中で、父親が屋根を修繕している間、彼自らは別のことに掛かりつきりになっていたわけでありまして・・・。

これらの夢は、徐々に転移状況に於いて私のなかで徐々に纏まってきたイメージに大いに助けとなりました。すなわち、抑うつ的な母親と一緒に幼子といったことです。母親は親密な情緒的接触は叶わず、実際のところ彼女は最初に産まれた双子の世話に忙殺されており、それとともに夫のビジネスのパートナーとしての内助の功を要求され、目一杯時間を奪われていたといったわけでありまして。そして彼のアイデンティティーは双子として対を成しており、もしくは彼の兄のアイデンティティーにくっ付いた、そうした子どもであったわけです。つまりそれが彼に母親からの‘表面的な自立’を与えていたというわけです。つまりそれでなんとか自分の要求がまさか母親の健康を損なうことのないようにいったことのようにです。思春期を迎える頃に己自身のアイデンティティーを求めて彼自身の個室を得ようとしたことは、物理的なフレームワーク・枠組みを得ることで自分を抱え、いかなる侵入からも身を守るためのものでありましてでしょう。一人での散策が彼に‘筋肉質的な自立性 a muscular independence’を与えたと同じように・・・。

しかしながら、今やここで‘修復し、かつ償う reparative 父親’が登場してまいります。詰りのところ、彼はその父親に同一化できるかも知れないといったことが暗示されているわけです。もしも彼が自分のことにあまりにもかまけているのではなければ・・・そして、この「償うペニス reparative penis」の助けを得て、それはすなわちさまざまな心の事象を継ぎ合わせるといった‘分析の解釈的作業’が表象されているわけですが、彼は彼のハウス—即ち彼の内界—に‘スペース’を見つけることが出来るかも知れません。それは抑うつ的な母親のためにとってもよろしいでしょう。そして‘彼という実在の形態’はやがてそのように拡張され、それを含むものとなってゆくかと思われるのです。

さて、最後にここでもう一つ、乳児観察の記録の抜粋を少しだけご紹介いたしましょう。どうやらこの赤ちゃんは、「良き内なる対象」と共に誕生してきた子どもと言えそうです。そしてここから‘出生前の胎児期’に於いて母親との関係性が胎児に及ぼす‘感化力 influence’というものについて実に興味深い論点が問われる気が致します。その論点といたしますのは、まさにビオンがかつてその晩年において心傾け、その著作【A Memoir of the Future (1975;1977;1979 [1991])】において吟味検討したところのテーマでもあります。そこには彼のいわゆる「想像的推測 imaginative conjecture」が言及されておりますが、「投影同一化」というものはもしかしたら‘胎内 womb’のなかですでに始まっているのかもしれないといったことのようにあります。〔※訳註; Bion, W.R. 【Bion in New York and San Paulo】(1980). Ed. F. Bion. Perthshire: Clunie Press. pp.79. 参照。〕

## 《観察例;エミリー》

エミリーは、若いご夫婦の最初の子どもであります。彼らは働きながら勉学を続けており、まだ今後の生活設計は定まってはおりません。母親が妊娠していると察したとき—それは計画されていたことではなかったわけですが—すぐさまひどくわくわくして、それから赤ちゃんに思わず語り掛けている自分にしばしば気づいたと語っております。妊娠中何ら問題はなく、分娩もスムーズにゆきました。

観察者は、赤ちゃんをその誕生の12時間後に訪ねております。病棟の部屋の隅で三人の家族が語らっているのを見ました。母親は半分眠ったふうに休んでおりました。赤ちゃんはコットの中におります。観察者は、その赤ちゃんの敏感に何やら‘聴き入る’表情とか、天井に向けて頻りに目を動かしているのを認めました。母親はそれから起き上がり、話をします。赤ちゃんの眼はそちらの方へと目を遣り、注意深げに静止させます。それは観察者が見ても、母親を認知しているといった顔付きとしか表現しようのないものでした。

最初の1, 2週間は、お互いに適応し合うことに困難があったといえます。母親はお乳が充分かどうか心配そうでありました。しかし赤ちゃんはとてもよく吸う子どもであり、もしもニーズが充たされないときには断固として主張する子どもであったのです。とにかく直に母親と赤ちゃんの間には親密な愉しげな関係性が発達してゆきました。赤ちゃんは最初の頃から微笑を浮かべる子どもなのですが、直にそれをはっきりとした‘社会的な微笑’に変わってゆきました。数週間後、彼女は授乳中にふと吸うのを止めて、そして長々とした抑揚のある声を出して‘お話をする’のでありました。彼女は他の人たちに向けてもそんなふうに、母親の膝の上に坐ったままで、同じように‘お話’をしました。彼女は誰でも自分と一緒に居てくれる人を嬉しがります。もしそれがあまりに侵入的ではないとしたら、ですが。

或るときのこと、彼女が生後8週間目になったとき、曾祖父母と父方の祖父がこのご夫婦を訪ねてきました。その折に、それは赤ちゃんが授乳を終えたときのことでしたが、彼らはしばし赤ちゃんの周りでお喋りに花を咲かせたり、赤ちゃんにも話し掛けたりしておりました。赤ちゃんはジッと彼らのほうを見据え、彼らの顔を見渡し、ほんの少し戸惑っているふうでありました。母親はそれから彼女を部屋の隅のソファーへと運び、いつものようにそこでオムツの交換を始めました。赤ちゃんは、最初、嬉しそうな表情をし、それからいつもの彼女の‘お話’やら‘お歌’なども続けてゆきました。一方で曾祖父母がその背後でうろついていたわけでありました。母親は、いつもの彼女流に赤ちゃんに気さくにお喋りをし、そして汚れたオシメを取り除きました。すると赤ちゃんの顔は突然しかめっつらとなり、それからひどく傷ついた表情を浮かべ、まるで苦情を訴えるかのようにわっと泣き声をあげたのです。母親はすばやく彼女を抱き上げ、それから隣の部屋へと連れ出します。<皆の目に晒<sup>さら</sup>されて、自尊心を傷つけられたみたいだわね>と謝るような口振りで彼女に語りかけ、そしてベッドルームでオシメの交換をいたします。再び皆

の集まっているところへと戻ってきたときには、赤ちゃんの顔には大きな笑顔が浮かんでおりました。ほんのしばらくして、その曾祖母が—香水の香りをさせ、宝石を着飾っており、そして饒舌な方でしたが—赤ちゃんを抱っこさせてと言います。そこでエミリーは手渡されたのであります。彼女はお愛想よく微笑を浮かべておりました。曾祖母は膝の上に座らせて彼女を抱き上げたり降ろしたり、そして賑やかに赤ちゃんに向けて語りかけ、もしくは「なんていい子なんでしょ」といったふうにくらか独り言を呟くやをします。ちょっと不安げな目付きが赤ちゃんの顔に浮かびましたが、それでも友好的のままでおりました。彼女は「お話」をして返してあげようとしていたのです。でもそれから、その「お話」の中にますます何やら抗う感じが混じってゆきました。恰も彼女はこのご婦人に、「わたし、こんなふうに使われるのに慣れていないのよ・・・」とでも言ってるふうでした。彼女の語りはますますその激しさを募らせてゆきます。恰もこのちょっとお喋りすぎる人を抑えこもうとしているかのように・・・彼女はこの試みをかなり雄雄しく数分ほど続けたといえましょう。でも遂にそれももう耐えられないと思ったのか、再び彼女はすすり泣きを始め、母親の方に助けを求めるかのように見遣ったのであります。

エミリーは、9ヶ月目近くになってようやく離乳されました。その1ヵ月後に最初の一步を踏み出しました。彼女が1歳になった頃には彼女は実に危うげなく自信ありげに歩行ができるようになってゆきました。この時期に、彼女は片方の手で哺乳瓶を口に咥えて歩きながら、そしてもう片方の手を延ばして周りのお喋りをしている両親とか訪問客たちの膝を軽く叩くといったことをするようになりました。これら「お愛想する」ことは日常的に彼女が出会う周囲の大人の誰に対してもいつも偏らず、分け隔てのないものでしたが、しかし何といっても彼女の母親への愛着はいの一番に熱烈であったのは明らかであります。

エミリーが1歳になったとき、母親がウィルス感染に罹ってしまいます。それは何週間も続いたのです。そのせいで彼女はとても疲れやすくそして気分が沈みがちでありました。エミリーはこのことに気づいておりました。時折母親の方を見遣って、不安げに氣遣うような目つきで、そして時折は何の理由もなしにしくしくとすすり泣くことがあったのです。或る日のこと、母親はその村落にあるお店にいつものように散歩がてら買い物に出掛けたのであります。普段ですと、帰宅時にはいつもエミリーをバギーに乗せて帰って来るわけですが、彼女はバギーから降りて、そして自分で歩くと言い張ったのです。坂道をあがりながら、かなりの距離がありましたのに、それも滅多にないほどに頑として決意を込めたふうに助けを拒むのでした。その1、2日の後、母親は病院に治療のため行かねばなりません。そこで即入院ということになり、1週間ほどそこに滞在する事態となったのです。最初の頃、母親はエミリーと離れ離れにされたことに痛く気を動転させます。赤ちゃんは大丈夫かともう半狂乱になるほど心配でたまらなかったのです。それも或る夢を見るまでは・・・その夢のお蔭ですっかり気持ちを落ち着かせることができたのです。それはこんな夢でした。

《彼女は地面の上に立ち、飛行機を見上げておりました。それは屋根のない飛行機でした。それは吹雪のなかへと突っ込んでゆくようであります。そこには何人かの人が乗っておりました。そしてそれらの一人がなんとエミリーです。でもよく見ると、どうやら赤ちゃんは単独で、しかも自分で操縦しなくて



はならないといった状況のようなのでした。母親はそうした何ら手出しが出来ない事態に身悶えするような焦慮に駆られます。ところがなんとその次の瞬間、エミリーは地面に降りて、彼女の傍らにすくと立っていたのです。操縦士の服をきちんと身にまとい、母親に向かって輝くような大きな笑顔を見せておりました。かくして母親は、〈わが娘は何とか切り抜かれたんだわ・・・〉と畏敬の念 awe に心打たれながらしみじみと彼女を眺めておりました。》

そして実際のところ、この夢はエミリーが母親からの分離にどうにか耐えているといった、真実母親の‘直感 a true intuition’であったことが判明されました。彼女は父親、ベビーシッター、それに友人たちによく行き届いた世話を受けており、それに毎晩母親に面会のため病院に連れてきてもらっていたのであります。父親が述べたところによりますと、E夫人が入院した最初の晩、彼はエミリーをベッドに寝かせるのに連れていったのですが、彼女はコットの柵を手でぎっちり掴んで、いかにも抵抗を試みんとするふうだったそうです。が、それから彼女は彼の顔をじっと見据え、どうやらそうしないほうがいいと判断したらしく、縫いぐるみの人形と一緒におとなしく横になったということです。それは、いかにもパパが困っていて助けを必要としている、だから自分はいい子にしなくちゃ・・・と悟ったふうなのでした。

E夫人が夢のなかで見た勇敢な、幼いわが娘に対して抱いた‘畏敬の念 awe’は、メラニー・クラインそして彼女の同僚の幾人か —殊に乳幼児観察セミナーに於けるミセス・ビック— が子どもたちそれぞれが逞しく‘個性 individuality’の華を開かせてゆく実態に携わり、研究を重ねてゆくなかで味わった敬意 respect やら感動 wonder に通底するものと、私は考えます。「理論 theories」は、児童分析及び観察に於いてわれわれが得たところの豊富なディテールをまとめあげ、整理整頓し、かつ秩序づけようとするうへでは当然助けとなるものではありませんが、それは飽くまでも補助的な意味で助けになるということであって、一つひとつの掛け替えのない「経験」の‘代替物’になるものでは決してありません。虚心に絶えず「経験 experience」に立ち還る姿勢こそが肝心要かと思われるのです。われわれは、人それぞれのいのちに対して‘畏敬の念 awe’を忘却することがあってはならないでしょう。

[※謝辞; Sandora Piontelli, Saraosha Forbes, そしてAndrea Watsonに深謝したい。  
この論文に彼らの手掛けた観察例並びに臨床例の記録抜粋の掲載を快く了解いただいた。]

(訳出; 2016/07/20)

\*\*\*\*\*

※原典; Growing points in psychoanalysis inspired  
by the work of Melanie Klein (1982)

by Martha Harris

Journal of Child Psychotherapy (1982),

Vol. 8(2), pp. 165-184.

\*\*\*\*\*

※参考文献;

- Alvarez,A.(1977).Problems of dependence and development in an excessively passive autistic boy. *Journal of Child Psychotherapy*,4(3):25-46.
- Bick,E.(1964). The Experience of the skin in early object relations. *International Journal of Psychoanalysis*.49,484-486.
- Bion,W.R.(1977). Seven Servants (4books: Learning from Experience; Elements of Psychoanalysis; Transformations ; Attention and Interpretation.) New York : Aronson.  
(邦訳;「精神分析の方法1&2」、福本修/平井正三訳。法政大学出版局.1999&2002.)
- Bion,W.R.(1991). A Memoir of the Future. Single Volume. London: Karnac.  
(Original edition 3 vols 1975,1977,1979.)
- Klein,M.(1961).Narrative of a Child Analysis. London : Hogarth Press.  
(邦訳;「児童分析 I & II、メラニー・クライン著作集 6&7、山上千鶴子訳、誠心書房.1987&1988.)
- Meltzer,D.(1973). *Sexual States of Mind* .Pershire : Clunie Press.  
(邦訳;「心の性愛状態」、古賀靖彦・松木邦裕監訳.金剛出版 2012.)
- Meltzer,D.,et al.(1975). *Explorations in Autism*. Pershire : Clunie Press.  
(邦訳;「自閉症世界の探究」、平井正三監訳.金剛出版.2014.)
- Meltzer,D.(1979).*The Kleinian Development*. Pershire : Clunie Press.  
(邦訳;「クライン派の発展」、松木邦裕監訳.金剛出版.2015.)
- Segal,H. (1964). *Introduction to the Work of Melanie Klein*. London : Heinemann.  
(邦訳;「メラニー・クライン入門」、岩崎哲也訳. 岩崎学術出版社.1977.)
- Tustin,F.(1966).A Significant element in the development of autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*,7:63-67.
- Tustin,F.(1969).Autistic processes. *Journal of Child Psychotherapy*,2(3):23-39.
- Tustin,F.(1972).*Autism and Childhood Psychosis*. London : Hogarth.  
(邦訳;「自閉症と小児精神病」、平井正三監訳. 創元社.2005.)
- Tustin,F.(1980).Autistic objects. *International Review of Psychoanalysis* 7:27-40.
- Tustin,F.(1981).*Autistic States in Children*. London : Routledge.

\*\*\*\*\*